

親が読ませたい本と子どもが読みたい本は違うもの。今、子どもに人気の児童文庫。

さまざまな出版社が、児童文庫(ジュニアノベル)を創刊しています。

これが人気!本屋さんに訊いてみた。—今どきの児童文庫売り場

教えてくれた人 山井洋子(リブログが丘店長)

1980年創刊の講談社・青い鳥文庫に、2009年創刊の角川つばさ文庫、そして2011年創刊の集英社みらい文庫。これらの3レーベルが児童文庫売り場を席卷していることを、大人はあまり知りません。どんなタイトルが人気なの?魅力の秘密はいったい?名作だけじゃない、児童文庫の今を教えてくださいました。

—「つばさ」、「みらい」、「青い鳥」という児童文庫の動向を教えてください。

児童書が堅調な中で埋もれがちですが、これらの児童文庫がとても売れているというところ、大人は結構知らないんですよ。メディアミックスとは全く関係ないところでも動いて、アニメ化していない人気作も目立ちます。『四つ子くらし』シリーズが今大人気です。

—「ぼくらの七日間戦争」「若おかみは小学生」シリーズなどは古典の域?

子どもたちって、いわゆる大人が読ませたい系の名作とは別に、自分たちで選んで読むことを求めている。それがこの児童文庫にあると思うのです。今の人気作を読んでいる子どもたちは、成長と共に作品を卒業していくから、次世代には受け継がれないでしょう。

そして次の世代の子は自分たちの新作を手にする。それが児童文庫の宿命なのではと思います。

大人の一般文庫の子ども版が児童文庫というわけでもないですね。児童文庫は書き下ろしがほとんどです。シリーズものがよく売れるから、連載の次回を待っている子どもたちがいるコミックの売れ方に近いかな。今の児童文庫の人气がコミックに近いと考えれば、コミックはどんなストーリーでも絵に魅力があってこそなので、児童文庫にとっての絵の重要性がわかってくるのかも。



—売り場の棚に残るのはなかなか大変なこと

絵本や学習漫画は、どちらかという親に買ってもらうもの。「つばさ」・「みらい」・「青い鳥」は自分で選ぶ比重が高い、そこに子どもたちの熱中の理由がありそうです。

この子どもたちは本を読む層の大きな土壌になっているのは確か、成長するにつれ、文芸書を読むようになるのか、ラノベ(ライトノベル)なのか。気になりますね。

本の雑誌社「10代のための読書地図」より抜粋

保護者と一緒に読むコーナー



秋の夜長に おすすめの本



ぼくのえんそく

穂高順也/作 長谷川義史/絵

熱を出して遠足に行けなくなってしまった「ぼく」。すると「行きたい」気持ちが体から飛びだして…!猫とジュース入りの水筒をつれ、不思議で楽しいぼくの遠足。

もりのかくれんぼう

末吉暁子/作・林明子/絵

わくわくしながらページを開くと、森の木々や草むらの中に、動物たちがかくれています。ぱっと眺めただけでは、見つけるのが難しいので、じっくり、よ〜く見てみてくださいね。本をさかさまにして眺めてもいいかもしれません。



すいはんきのあきやすみ

村上しいこ/作 長谷川義史/絵

運動会の日、お弁当をつくらうとしたら、すいはんきに手足がついて、しゃべりはじめた!しかも、運動会に参加したいと言いだしたから、さあ大変!

かくや姫のおとうと

広瀬寿子/作 丹地陽子/絵

ふしぎな少年・いささ丸と出会った想は、1200年も前からくり返されてきたという生まれ代わりの話を聞く…。時を超えて紡ぐ壮大な愛のファンタジー。



チキン!

いとうみく/作 しがしわかおり/絵

あなたのクラスにもいますか?当たりさわりのない意見をいう人。正しいと思ったことはズバッと主張する人。凜さんのような転校生が来るかもしれません。おたがいが思いやりを持って相手を理解しようとしたら、何かが変わっていくでしょう。